
カオス・クロニクル

岡村 としあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カオス・クロニクル

【Nコード】

N3140Z

【作者名】

岡村 としあき

【あらすじ】

MMOの黎明期はとうに過ぎ、数々のタイトルがサービスを終了してきた。サーバー統合。つぎはぎだらけのアップデート。放置されたバグ。このカオス・クロニクルもまた、混乱の時代にあった。サービス終了目前と囁かれるMMOで、一人のベテランプレイヤーと一人の初心者プレイヤーが会う。

*MMOの特性上、チャット内の会話を表現するため、文中には顔文字を使用しています。横書きでお読みいただくことを推奨します。

押し切れなかったEnter

一瞬の迷いが命取りになる。たった一度のミスが原因で全てが台無しだ。そうならないように、ただただ最善を尽くす。

綺麗な鎧を着込んだ金髪の若い男や、下着同然の派手なローブを着込んだ銀髪の若い女、2メートル近い体軀をした緑色の肌の大男。彼らの命を守ることが、ここでのオレの役目。

目の前で火花が散る。薄暗い洞窟の中で、戦いが始まった。ロックアントと呼ばれるモンスターの討伐……それが今回の仕事だ。

近隣の村人を襲う悩みのタネで、これを数体討伐すれば、村長からたんまりお礼がもらえるというわけだ。

アントの巣と呼ばれる洞窟は、入り口が一人一人入るのがやっとだった。中に入ると中は迷路のように入り組んでいて、一度はぐれると死体で再会……なんてことになりかねない。

今回組んだのはオレを含め4人だ。鎧の若い男が、シュレン。エロいねーちゃんがマリABEL。大男がバックン。そしてオレ……エルト。

入り組んだ迷路を進むこと数分。大きな空間に出た。その直後だ。所々の穴という穴からアント……バケモノアリが湧いてくる。

シュレンが切り込む。盾を持つ左半身を前に出し、右手の剣で襲い掛かってきたアリの前足を切り落とし、そこに畳み掛けてきた別のアリの攻撃を左の盾でガードする。

しかし、次の瞬間そのアリは自分の頭を失っていた。パツクンが左右の手に握った鉄のハンマーで背後から飛び掛り、頭を叩き潰したのだ。返り血にも似た粘液を顔に受け、パツクンは笑う。シユレンのほうも、鎧を緑色の何かで汚していた。

横穴から沸いて出たアリに、マリABELが火属性の中級魔法『ブレイズアロー』の詠唱を始める。マリABELの足元に六芒星の魔方阵が発現し、彼女の掌からバスケットボールほどの大きさの火炎球が3つ放たれ、アリを焼き尽くす。

耳障りな『ギギギ』という音を立ててアリは灰となって大地に還る。

今日初めて組んだ彼らだが、チームワークは即席にしても、うまくまとまっていた。

「3匹来た！ スリを頼む」

「わかった」

オレの出番らしい。オレには彼らの様に、強固な盾も無ければ、一撃必殺の技もないし、圧倒的な火力を持っているわけでもない。やれることはただ一つだ。

彼らのサポート。

対象の意識を数秒間奪うことのできる催眠魔法『スリープ』の魔法を使う。オレの足元にもマリABELと同様の六芒星の魔方阵が発現する。

白い霧がアリ共を包み込み、意識を奪うことに成功。その間にシュレンの体力を回復するべく治癒魔法『ヒールライト』を唱える。

シュレンの体は白い光の柱に包まれ、傷付き、血がにじんでいた皮膚が即座に修復された。

「よし、あと一息で目標数達成だ」

このチームのリーダーである、シュレンの掛け声で士気があがった。パクンもマリABELも、やる気をたぎらせている。オレはそれを後ろから冷静な目で観察していた。

ヒーラーであるオレまで熱くなるわけにはいかない。状況の変化を見極め、敵との適切な距離を保ちつつ、味方に絶妙なタイミングでアシストを入れる。生命線であるオレが無闇に前に出るわけにはいかない。

それがヒーラーだ。

シュレン達の活躍もあり、程なくして予定数の討伐が終わった。

討伐が終わったオレ達は、村に帰還すべくオレを中心に集まった。帰還魔法『リターン』を発動させる。発動と同時に、一瞬視界が暗転し、景色がのどかな山村の風景へと様変わりした。

「おつかれ、またよろこばせ」

「おつですー」

「おちゅ ^^」

オレ以外のメンバーはそういい残し、パーティーを解散すると、村長の家へと報酬……クエストアイテムとお金を受け取りに行った。

『またよろしく』。ディスプレイにそう表示された文字。あとはエンターキーを押すだけ。たったそれだけの事を、一瞬躊躇^{ためら}った。

夕闇が空を支配しつつある午後5時。窓辺にまで闇の魔の手が伸び、室内は真っ黒だ。

学習机の上に設置したノートパソコンのディスプレイ……。そこには、青い髪の少年が映し出されている。

先ほどまで、動かしていたキャラクター……エルト。

エルトはまるで、プレイヤーと同じ様に面白くなさそうな顔をして、鋭い視線で空を見つめていた。そういう顔に設定したのは自分だが。

しばらくエルトと同じ様に天井を見上げる。そして、キーボードを6回叩いた。

メッセージウィンドウには何も表示されていない。Backspaceで消したからだ。

もう誰とも関わりたくない。彼らともこれっきりだ。ソロのほうが気が楽でいいし、時間に縛られずに済む。

足を引っ張るのも嫌だし、引っ張られるのはもっと嫌だ。

一匹狼でいい。

再び視線を天井に向け、イスの背もたれに全体重を預けると、大きく伸びをする。

席を立ち、パソコンの電源を入れっぱなしにしたまま、自室から出ると下の階へと降りていった。

まるで……ゲームからも逃げているみたいでなんだか嫌な気分になった。

出会いとターニングポイントなネタ師の初心者

カオスクロニクル。純国産MMOである。サービス開始から8年……日本のMMOの黎明期を生き続けたゲームだ。

美麗なグラフィックと6つの種族と8つの職業。プレイヤー同士が戦うPVPシステム。

当時のMMO業界に新風を巻き起こし、最盛期はサーバーが混雑しすぎて臨時サーバーメンテナンスが週に2、3度あった。

それから7年経った今は……サーバーも統合され最盛期の見られる影もない。それまで月額制だった課金システムも、基本無料になり、プレイヤーの数は一時的に増えた。

育成も大幅に楽になり、新規プレイヤーが増加したのだが、それも一時のこと。無料になった事で、低年齢層のプレイヤーも増加した。

彼らの中にはモラルに欠ける者も少なくなかった。それが古参プレイヤーとの軋轢を生むのにそう時間はかからなかった。

現金でゲーム内通貨を購入するリアルマネートレード……RMTや、ゲーム内のキャラをプレイヤーの変わりに育成する、育成代行が蔓延^{はびこ}り、それに手を染める新規プレイヤーも後を絶たない。

そんな新規プレイヤー達がいわゆる『害プレイヤー』になって、面白半分にPVPを初心者や低レベルプレイヤーにしかけ、低レベル帯の狩り場は一時、害と古参プレイヤーの死体が転がる戦場とな

った。

それから1年。害プレイヤーの多くは飽きてしまったのか、姿を見せる事はなくなり狩り場は以前の姿を取り戻した。

MOBだけのフィールド。静か過ぎるダンジョン。入場制限無しにいつでも入れるインスタントダンジョン。

それが、元の平和なカオス・クロニクルの姿だ。

ゲームに戻ってきたオレは、空を見上げながらふと思い出していた。CGで描かれた青空には雲の塊がゆっくりと現実世界さながらのように流れている。

時刻は午後9時。外は真っ暗だが、カオス・クロニクルの世界では昼間だ。日曜の夜。普通ならば、回線が込み合ってラグが多くなる時間帯なのだが、依然快適である。

パーティーマッチの画面を開く。まばらだが、いくつかパーティーメンバーを募集しているパーティーがあるらしい。ご苦労なことだ。

とりわけ、ヒーラーが不足しているのか、ヒラ様募集中のコメントがよく目に付く。すると、案の定だ。

「どもっすー。今ヒマしてません？ よかったら悪魔の森にでも行きませんか??」

「どうも。他のパーティーに誘われちゃったんでまた今度お願いします」

「りょーかい^^」

ご苦勞な連中からたくさんのお金……プレイヤー間同士で会話するウィスパームードでラブコールが飛んでくる。そのすべてを同じ理由で断って、うんざりしながらパーティーマッチ画面を閉じた。

興味本位で開くべきじゃなかったな。

インベントリを開いて、所持品の確認をする。すると、MPポーションが切れていたので買出しに行くことにした。念の為、自分の倉庫を覗いてみたがストックがなかった。

シュレン達とクエを受けた村『オルティアの村』を出て、街道を一人行く。川沿いの道を歩いて、草原を走る。ここまでの道のりで、他のプレイヤーとすれ違う事はなかった。

当然か。いまさらこんな死に掛けのゲーム……新規で一から始める物好きはまずいない。このあたりは低レベル帯ゾーンだから、プレイヤーよりもNPCの数が多いんだろう。

……快適だな。そう考えていると小高い丘の上に出て、目的地が見えてきた。

『ハリの村』……通称、初心者村だ。カオス・クロニクルを始めたプレイヤーはこの村からスタートする。

基本的なチュートリアルを兼ねたクエストを受け、レベル15程度で外の世界によく繰り出せるわけだ。

ハリの村は、基本的にすべての物品が低価格だ。初心者が買いやすいように値段が設定されていて、他の村に比べ2割ほど安い。

オレは、消耗品は週に一度ここに買いに来て、倉庫にぶち込んでおくようにしている。他にも何か切らしている物はあったかな？とそう考えていたときだ。

珍しい。村の前で、ラグが起こった。

ラグの原因は目の前……それを見てオレは声をあげそうになった。恐ろしい数のMOBが渦巻いていた。50くらいだろうか？それらが村から少し離れた平原でぐるぐると竜巻のようにうねっている。

大量に集めて範囲スキルをぶち込むまとめ狩りだろうか？それとも、初心者を対象にしたMPK？

どちらにせよ、関わるつもりは無い。無視して村の入り口に立った時。MOBの渦が突然散らばりだした。どうやら、渦中のプレイヤーは戦闘不能になったらしい。

いったいこのアホだと思っ、そこに近づいた。

珍しい。素直にそう思う。そして、納得した。

カオス・クロニクルには、6つの種族が存在する。ヒューマン。エルフ。ダークエルフ。ドワーフ。オーク。フェイブ。

ヒューマンや、エルフなどは他のMMOでも良く見かける種族だ

が、カオス・クロニクルにはオリジナルの種族が一つある。

それが、フェイブ。

フェイブは、古代人が神と戦う為に作り出した^{ホームクルス}人造人間だ。ヒューマンの遺伝子を元に、エルフのビジュアル。ダークエルフの魔力。オークの力。ドワーフの器用さ。

それらを兼ね備えた戦う道具として、愚かな古代人が神様ごっこの果てに生み出した最終兵器の一つである。

白く美しい肌に、流れるような銀髪。宝石よりも美しく輝き、闇の中で不気味に光る赤い瞳。

ヒューマンの手足として、死すらも恐れない殺戮人形。ここまで語ればこの種族は最強なんじゃないか、とか考えてしまいが唯一にして最大の弱点がある。

寿命だ。所詮は古代人の神様ごっこ。凄まじいまでの戦闘力を持ち、死すらもおそれない彼らだが、その寿命はたったの20年。

というのが歴史的な設定で、ゲーム的な設定はというと防御が紙なのだ。

高い攻撃力、高い魔力、底を見せないMP。そして、あってもなくても同じ0に等しい防御力と、一撃食らえば即死レベルのHP。

6回目くらいのアップデートで追加された種族で、追加当時はチート性能で右を見ても左を見てもフェイブ、フェイブ、フェイブ。

そして次のアップでネタに早変わり。今も、野良のパーティーでフェイブを使って紛れ込むと、即追い出される。

ネタ師か、初心者か、よっぱどの熟練者でなければ使いこなすのは難しい。そう。

オレの目の前で倒れているのは、フェイブの少女だった。

「おい、大丈夫か？」

蘇生魔法くらいはかけてやろう。久しくお目にかかっていないフェイブだ。

案外、大量にMOBを引いたのも何かのネタだったのかもしれない。

しかし、30秒立っても、1分立っても返事は無い。離席しているのかもしれない。そう思って、その場を離れかけたときだ。

「おんがいsmすっすしゅ」

「はあ？」

意味の分からない、初めて耳にする……いいや、初めて目にした言語だった。SMとか言ってるからやっぱネタ師か、こいつ。

「おねがいします」

どうやら、単なる打ち間違えだったらしい。

スキルアイコンから、蘇生魔法『リザレクション』を選び、フェイブの少女を蘇生する。

光の羽が上空から舞い降りて、少女は起き上がった。

それが、オレとこいつの出会いで、ターニングポイントだった。

フェイブナイト

「助かりましたあ^^w」

フェイブの少女は立ち上がるやいなや、ソーシャル『喜ぶ』を使って、子供のようにきゃっきゃつと飛び回った。

キャラクターの真上に表示されている名前を見る。……punpun321という名前だ。なんだこりゃ？　punpunさんにーいち？　マジでキレル3秒前とかいう意味か？

「punpun321です^^v　punpunって読んでくださいね」
「

punpunはそういうと一人で拍手したり、一人で泣いたり、一人で笑い始めた。もちろん、これもソーシャルによるものだが。『褒める』、『悲哀』、『笑い』を使ったんだろう。

「いや、驚いたよ。まさかフェイブのネタ師がまだ全滅してなかったなんて」

「punpunはネタ師じゃありませんよぉ；；　頑張つてレベルを上げていたのです！　そしたら、まわりのモンスターさんがいっぱい寄ってきてちゃって……」

どうやら、無闇にMOBの群れに突っ込んだ挙句、大量にリンクさせてしまったらしい。初心者によくありがちなミスだ。

「でも、助かりましたあ！　蘇生ありがとです^^」

プンは再び、ソーシャル『踊る』で一回転してみせる。プンのシルバーの長い髪とワンピースの裾が優雅になびいて、銀色の妖精が草原に舞い降りたかのように錯覚する。

女フェイブはビジュアル面だけでいえば、女性キャラの中でもっとも人気が高い。

特に、カオス・クロニクルの女性キャラクターの装備は、露出が多く、ローブ系の装備などは下がミニスカートになっていて、スキルを使う瞬間カメラの角度を変えれば……見える。

女フェイブはエルフ並みの美しさを持ちながら、出ているところはけっこう出ているのだ。

プンが装備しているのは、クエストでもらえる報酬アイテムの、グレードがかなり低いローブなのだが、白いワンピースのようになっていて、丈が膝上20CMくらいしかない。

それを纏ったプンが、さっきからやたらとオレの目の前で乱舞している。その度、危うい角度で聖域がこの不浄なる世界にさらされているのだが……後で注意してやるか。

とりあえず、このまま去ってしまったてもよかったのだが、いくつか忠告でもしといてやる事にする。また村の前でラグ起こっても嫌だし、何度も『蘇生してください』なんて、ウィスが来たら鬱陶しい。

「オレはエルト。レベル44のビショップ……ヒーラーだ」

「プンはレベル12のフェイブナイトです！ よろしくね、エルくん^^」

ナイト……フェイブナイト……レアだ。とりわけ紙装甲のフェイブに一番ミスマッチな職業の組み合わせ。

敵の攻撃を一手に引き受けるナイトは、パーティー狩りではとても重要な職だ。ヘイトスキルを使って、敵のターゲットを自身に集中させれば、ヒーラーにとってもHP管理がしやすい。

高い防御力と、敵のターゲットを自身に向けさせるスキル。パーティーでは文字通り盾であり、壁なのだ。

それ故、どのパーティーも必死にナイトを勧誘しようとするのだが、いかんせん数が少ない。敵のターゲットを集めるという事は、それだけ死亡率が高いということでもあるからだ。

カオス・クロニクルでは死亡すると経験値が減少する。それも、20分くらい狩りをしてようやく取り戻せるくらいの量だ。パーティープレイには困らないが、それ以上にリスクが大きいので敬遠されがちな職業である。

それに……フェイブナイトは不遇職かつ、不人気職のナンバーワンで、ナイト募集のパーティーでも、『それならローブを来たヒーラーのほうがマシ』だなんて、冷たく言われてしまう。

レベルが60になれば神スキルと呼ばれる『ヴァンガード』が使えるのだが……そこまでマゾな奴はそうそういない。

こいつは、何でこんなマゾいを選んだらう……ふとプンを見

ると、いつの間にかMOBの群れに突っ込んで、仲良く鬼ごっこに励んでいた。

しかも、さつきよりも数が多い。……あいつ、絶対何も考えずに外見と名前だけで選んだな。

「いや~~~~~~~~>< 助けて、エルくん……」

チャットとキャラの操作が同時に出来ないらしい。急に立ち止まったプンはボコスカMOBに殴られて、悲鳴を上げて倒れた。その10秒後にさつきのセリフが流れたわけだが……。

それにしても……誰もこいつと組もうとは思わないだろうな。初心者で、不遇職で、プレイヤースキルもないし、何も考えてない、チャットも遅い。……オレもこれ以上関わるのはよそう。

初心者に関わるとロクな事がないのは、オレ自身がよく知っているはずだ。それは一年前、嫌と言うほど思い知っただろう？

クソ……思い出すだけで……腹が立つ。

「プン。お前、ギルドは？」

リザレクションをかけ、再び蘇ったプンにそう問いかける。

プンはまた一回転して、ワンピースの裾を危うく舞わせると、おもむろに派手な紋章の入ったマントを装備して、こちらに振り向いた。

「入ってるよー^^ これがプンの所属しているギルド『灰色の狼』」

のギルドマントなのだ>< どうだ、マイツタか@@w」

背中をこちらに向けて、プンはそう言った。

その小さな背中にくっ付いているマントの紋章を見て……マウスを握る人差し指が……一瞬停止する。

ギルドに加入したプレイヤーには、無償でギルドエンブレムが入ったマントが支給される。

プンの背中には猛々しい狼の顔がドット絵で描かれていた。

「お前……『灰色の狼』のメンバーなのか」

灰色の狼はオレがプレイするサーバーで最大手のギルドだ。ギルドメンバーは常に100人以上いて、エリアボス討伐を独占していたり、各職業ナンバーワンを決める『トーナメント』にその名を多く刻んでいる。

ギルメンは廃人ニート共がほとんど。さっき組んだパツクンも『灰色の狼』のギルメンだった。

「プン、それならギルメンに声掛けて育成手伝ってもらえよ。こんな所でソロなんかしてないでさ。手伝ってもらったほうがすぐに転職もできるぞ?」

後はギルメンさんに任せよう。元々、こいつに興味があったわけでもないし、そもそもオレは、初心者支援の優しいベテランプレイヤーなんかじゃない。

だが、プンはすぐに返事を返さない。

「……」

わざわざ沈黙をチャットにして表して、先をもったいぶってみせる。何が言いたいんだ、お前は？

キーボードの上に載せたFキーとJキーの上で、軽く指を動かし、苛立ちながら辛抱強く待つ。

「……」

数秒間を置いて、プンが喋りだした。

「皆、忙しいから無理って言われた><; ギルメンなのに助けてくれないよーどうしよう、エルくん……」

どうやら、ギルメンにも煙たがられているらしい。大手のギルドなんて、そんなものだ。勧誘するだけしといて、あとは放置。

あとは各自、自由にギルメンと仲良くやっってくださいねー。とか言っただけとかれる。周りにすぐに溶け込めるようならいいが、そうでなければ孤立してギルドに居場所はない。

孤独なのだ……プンは。

狩り場に行っても誰もいないから、同じレベル帯の友人もできないし、ギルドでは初心者扱いされて、半分バカにされているんだろう。

かわいそうと言えばかわいそうだが……。ボランティアで友達ごっこなんてオレはごめんだ。

「ねえ、エルくん？」

プンがオレに疑問形で何かを問いかける。解っている。その先の言葉は。オレに超能力はないが、その先の言葉は解る。

だから。

その言葉が出る前に。

プンよりも早くキーボードを叩いて。

その言葉を紡ぎ出す。

「一人でも大丈夫な狩り場、教えて！ プンがんばって狩りうまくなるから^^」

オレの言葉よりも早く、プンがオレの予想を裏切る言葉を紡いだ。

それでも、オレの心は変わらない。

すでにメッセージウィンドウには文字の羅列がセリフとなって、Enterを押されるのを今か今かと待っている。

キーボードを操作して、オレはオレの意思をプンに伝える。

『彼女に送るプレゼント』

「ありがとうございますあ」

能天気そうなセリフを背中に受けて、村の道具屋から一步外にでる。

道具屋の看板娘ホリーちゃんは、村一番の美人らしい。そう何度も村の警備員マーシーが独り言を繰り返しているので、これはプレイヤーの間でも有名な話だ。

クエスト『彼女に送るプレゼント』は、14レベルで一回だけこのストーリー警備員から受けれるが、その報酬が経験値と装備のセットなのでこれをやらない手はない。

内容も、一匹だけクエストモンスターを狩るだけでお手軽だ。

道具屋を一人出たオレは、倉庫に向かった。倉庫番のドワーフに話しかけ、消耗品をたくさんブチ込んでおく。

隙間なく押し詰められたポーション類に、癒される。やっぱり、物がぐちゃぐちゃしている方がなんだか落ち着く。ちなみにオレは掃除が苦手だ。

今も部屋の床には色々物がちらばっている。両親がそれを見るたび溜め息について『片付けろ』とうるさい。余計なお世話だ。

いや、そんな事は今はどうでもいい。問題は別にある。

倉庫を後にして、村の塀にそって外に向かう。見えて来た。

ストーカー警備員マーシーが今もうつむいて、『ああ、ホリーちゃん……』とか、『今どうしてるんだろっ、ホリーちゃん……』と、ホリーちゃんへの思いを募らせている。

そのマーシーの前に、軽量の鎧に身を包み、剣と盾を持った銀髪の小柄なフェイブの少女がいた。

「クエ、ちゃんと終わったか？」

「うん、エルくんのおかげだよ！　ありがとう！>|<」

ブンがオレに近寄ってきて、飛び跳ねる。子犬のような奴だ。

「レベルも15になったから、違う村に行けるね、やったー^^v」

「そうか、15になったか。じゃあ、『ミロンの村』に行こう。うまいクエをいくつか知ってる」

「ほんと@@　お世話になります、師匠m(____)mペコリ」

ようやくナイトらしくなったブン（装備だけだが）を背中に、ハリの村が出る。

目指す先は、ミロンの村……近くにゴブリン前線基地という、少し難度が高めの狩り場がある。そこでこいつのレベルを上げる。

「ブン。ちょこまか動き回るな。アクティブモンスターを引っ掛けるぞ」

「ひゃあ、助けて@@!」

言う前にすでにプンは何匹かのウェアウルフと戯れていた。本当に世話の焼けるお姫様だ。

それら全てを杖で叩きのめし、静かにさせた。

「うわあ、エルくん強い!」

「いや……いくらオレがヒーラーとはいえ、レベル1のウェアウルフを倒すのは、高校生が幼稚園児に電気あんまをかけるような物だ」

小学生の時、二つ年下の弟にかけて泣かしてしまった事があったな、そういえば。

「電気あんま（?ー?）」

プンが頭を疑問符でいっぱいになっている。

「なにそれ、楽しいの? プンにもやってみて、エルくん^^」

「ぐぐつてみる。その上でやってほしいというなら、オレの奥義を見せてやろう」

「うわあーい^^」

プンは嬉しそうにはしゃぎながら街道をかけていった。……数引きのウェアウルフを引き連れて。まったく、世話が焼ける。

だが、それも少しの我慢だ。こいつがレベル40になれば……。そうなれば、用済みだ。

オレはブンと一つの取引をした。

このゲームでは、レベル40未満のキャラと40以上のキャラは師弟関係を結ぶことが出来る。師弟関係を結んだペアには様々な恩恵がある。

二人がログインしていると互いの取得経験値が増加する。40以上は1.2倍。40未満は2倍になる。

さらに、ペアの片割れがレベル40に達成して転職を終えると、40以上のキャラ（この場合はオレが該当する）には、高価な武器が送られる。

オレの目的はそれだ。でなければ……ブンのような問題児を抱える気にはとてもなれない。

ブンが40レベルにさえなればいいのだから、最初は適当に付き合っ、あとは狩り友を作らせて勝手に40になってくれればいい。

オレはそれまでログインしなくてもいいし、別のゲームで遊ぶか別のキャラでプレイして、ブンが40になるのを待てばいい。

今だけの辛抱だ。ブンの奇行に振り回されるのも、ブンのお世話係をするのも、今だけの……。

「っておい、ブン！どこ行った!？」

気が付けば、プンの姿はどこにもなかった。ゲームから落ちたか？

「ここだよおお……」

どこからともなく、プンの泣きそうな声（本日6度目）が聞こえてくる。

カメラをぐるぐる回してようやくプンを発見すると、ディスプレイの前でオレは大きな溜め息を付いた（本日23回目）。

「お魚泳いでるキレイな川眺めてたら、落ちちゃった。てへ（ハ・ハ・ハ）」

何がてへ（ハ・ハ・ハ）だ。ふざけんな。またリザレクションか。

プンのHPは川に落下した時1になり、呼吸できずにダメージを食らい水死体になって、ミロンの村の前の川を流れていた。

ディスプレイの前でオレは本日24回目の大きなため息を付く。

まだ時刻は午後10時になったばかり……一時間でオレは24回もため息を付いたのか。

さっさと40レベルになってオレから卒業してくれ、プン……。

初めての狩り友

ミロンの村は海に面していて、小さいが港もある。村の前を流れる川はそのまま海に繋がっていて、プンは川で蘇生された後、泳いで海に出ようとした。

『お魚いっぱい取ってくるね、獲りたてはきつとおいしいよ^q^じゅるり』などと言って、犬掻きで大海原へ漕ぎ出したプンは、またもHPゲージがやばいことになっていた。

リターンを使って、強制的にミロンへプンごと帰還させる。即座に周囲は石造りの簡素な家が立ち並び、閑散とした風景に早変わりした。

「エルくんのイジワル！ お魚はDHAがたくさん含まれてるんだよ！ お肉ばかり食べてたらダメなんだゾ！ ぶんぶん><」

「お前はアホか」

プンがぶんぶん言い出したので、一蹴してやる。そもそも、このゲームに狩猟とかの要素は無い。

海中を行けば、たまに水中型のMOBと出くわすこともあるが、狩ったところで手に入るのは経験値と少量の金だけだ。それにオレの食生活は野菜が中心だ。ピーマンは苦手だが……。

「プンはアホじゃないよ！ プンだもん><」

意味が解らん。

けれど……確かにオレも始めたころ、ミロンの村の前で川に飛び込んだことがあったな。その時、偶然近くにいたヤツも泳いで……一緒に泳いだことが縁で狩り友になって……色んな所に行ってバカをしたものだ。

世界が新鮮に見えた。目に映る全てが、キラキラ輝いていた。場違いなくらいレベルの高い狩り場へ迷い込んでしまっただけで、ザコモBに瞬殺されたり、エリアボスと知らずに殴ったら、他のパーティーメンバーまで巻き込んで全滅したり……。

ブンもそうなのか。今のブンには、この死に掛けのカオス・クロニクルが、とてもキラキラと眩しい世界なんだ。オレにとっては……ヒマな時間を潰す、ゴミ箱みたいな所なのに……。

ブンもやがて思い知るはずだ。この世界は、自分が思っているほどキレイなんかじゃないことに。

MMOと言っても、リアルと一緒になんだ。なりたい自分になんかなれない。結局、ここにいるのは現実の自分だ。

それは他のプレイヤーも同じ。『人間』なんだ。『人間』は……残酷だ。昨日まで友達だと思っていたら、今日は平気な顔して、裏切れるんだ。

だからオレは……誰も信じない。リアルもMMOも、信じられるのは自分だけ。他の奴らは、最後には敵だ。友達ごっここの果てにあるのは、残酷な結果だけ。

ブンにもそれを教えてやらなければならない。実際、ブンだって

ギルドに誘われておきながら、誰にも相手にされていないじゃないか。

ブンなら、解るはずだ。

「って、またか！ どこ行った、ブン！」

「ここおおおお：：：」

なんと、すぐ真横からブンの悲痛な叫び声が聞こえるではないか。カメラを右に向けるが、そこには誰もいない。

ブンは確かにそこに存在するのだが、石の壁以外何もない。すると急に、石の壁から人の顔が生え出てきた。

「うわああああ！？」

「壁にめり込んだじゃった、もうお嫁にいけない、つゝぐすん」

移動不可状態になって、壁と同化していたらしい。再度リターンを詠唱し、ブンを救出すると、村長からクエスト『ゴ布林討伐』を受けさせ、当初の目的地、ゴ布林前線基地へと向かう。

村から歩いて移動すると時間が少しかかるので、テレポーターを利用することにした。

テレポーターは、少々お金を使うが、一瞬で狩り場や他の村に移動できる便利な機能だ。村の広場に突っ立っている若いヒューマンの女性がテレポーターだ。

彼女の前に立つと、プンにゴブリン前線基地へのレポート代を手渡し、移動する。

一瞬で目の前の景色が移り変わり、不気味な背景が画面いっぱいに広がっている。

BGMも、それまでのどかだった村のそれから、緊張感のある、今にも戦いが始まりそうなRPGっぽいのに変わる。

前線基地と言っても、切り崩された岩山に木で出来た簡素で居住性のなさそうな小屋が数軒と、丸太を縦に並べただけの柵が周りを覆っているだけ。

所詮ゴブリンの巣である。MOBのHPもそう高いほうではないので、楽に倒せる。

とはいえ、ここをナメてかかると痛い目に合う。このMOBはHPが20%以下になると、命乞いをしながら、小屋に逃げ出そうとする。

逃してしまつたら……その時は終わりだと思つたほうがいい。

数匹のエリートゴブリンを引き連れて戻ってくるのだ。数は2か3と大したことは無い、問題は奴らの能力が他のザコモBと一線を画しているという事だ。

その分、倒したときの経験値と獲得金額もバカに出来る量では無いし、高確率で装備アイテムをドロップする。

上級者の中には、あえてこれを狙う者もいる。だが、装備が貧弱

な上、フェイブのプンではまず詰むだろう。

そこで、オレの出番というワケだ。ターゲットを引き離すのは何も、ナイトのヘイトばかりじゃない。

ヒールライトを連発すれば、MOBの優先はヒーラーに向かう。ヒール系のスキルは敵対心を煽りやすく、無闇に連発すればヒーラーが襲われてしまうのだ。

そこを逆手に取る。あえてプンにヒールを連発してターゲットをオレに向けさせる。このレベル帯の攻撃なら、ローブ装備のオレでも十分に耐えられる。

その際にプンに各個撃破させ、一気に成長させる。ちんたらやっている暇は無い。明日は月曜日。学校もあるし、0時には寝ておきたい。

「行くぞプン。オレについて来い」

「あい！ @@ゝ なんだかエルくん、頼もしいゝ。もしかして、エルくんて弟さんか妹さん、いるの？」

オレの後ろをぴよこぴよこ付いてくるプンが、無遠慮に質問を始める。

「いるよ、二つ下の泣き虫な弟が一人」

「やっぱりー！ エルくんて頼りになる優しいお兄さんって感じがしてたもん^^」

「違つよ、オレは」

と、そこまで喋りかけて後悔した。基本的にオレはリアルを語らない。ゲームはゲームだ。ここは出会い系サイトじゃない。

相手のリアルにも興味がない。オレは、ゲームをしているんだから。

「プンはね。一人っ子なんだあ。いいな。兄弟><」

「そうか」

「エルくんエルくん！ エルくんはどんなお仕事してるの？ プンは高校生だよ^^」

高校生か。確かにそんな感じがするな。リアルのプンも、のほほんとしてて、天然なヤツかもしれない。

「エルくんって落ち着いてるよね。@@ もしかして、30代の大人だったりする！？ キャー！ 渋い！」

「誰が30代だ！？ オレもお前と同じ高校生だよ。高校2年生だ、17歳だ。文句あるかコラ！ あるなら20文字以内で言ってみやがれ！」

しまった。ついつい熱くなって個人情報の一部が開示してしまった。にしても、なかなか失礼なヤツだな、プンは。

「えー@@ 同い年なんだ。エルくんってやっぱりすごいんだね。プン、尊敬しちゃいます><」

どこに敬意を表す部分があるのか解らないが……やっぱこいつ、苦手だ。ペースを崩されるし、行動が読めない。

「……ここでもいいか」

ゴブリン前線基地はそれなりに面積が広い。入り口付近は比較的MOBの数が少ないし、レベルも低めだが、奥のほうに行くと、前述の小屋もあるしワンランク上のゴブリンも出てくる。

岩山の崖になっている所に、木でできたお粗末な小屋……その周りには、6匹のゴブリン。当然、リンクする。適正レベルのプレイヤーが突っ込めばたちまちピンチだが、オレはその適正レベルから20以上高い。

ゴブリンの群れに突っ込んで奴らの注意を引き付ける。一斉に奴らから袋叩きに合うが、ダメージは一ケタ台だ。

「よし、オレが引き付けている間にやれ、プン！」

「あい！ @ @」

プンの装備している剣が、背後からゴブリンを切り裂く。数回の斬撃を繰り返すとゴブリンは力尽き、地面に倒れフェードアウトし、消える。

やはり、ナイトであってもフェイブだ。攻撃力は他の種族のウォーリア並みである。

瞬く間にプンは全てを平らげる。思ったよりもプンの火力は高い

らしい。これならレベル上げにそう時間はかからないかもしれない。
時間が経てば、すぐにゴブリンが出現するのだがそれだと時間が
惜しい。別の場所から数匹引いてくるか。

そう思っただけ移動しようとしたときだ。

スピーカーから、戦闘音が聞こえた。剣撃のSEや、ダメージを
食らったときのSEに、男の太い声。

「他にも狩をしているプレイヤーがいるのか」

「珍しいね@@」

ここからそう遠くない距離にいるようだ。そうだ。丁度いい。そ
のプレイヤーとプンを一緒に狩らせよう。二人が狩り友になってく
れば、プンの育成をそいつに任せてしまえる。

「プン。一緒に狩りをする友達が欲しくないか？」

「欲しいー><」

「なら、ちょっと行ってみよう」

プンを引きつれ、音の発生源のエリアまで行くと、そこでは緑色
の肌の大男が巨大な剣を両手で振るい、ゴブリンを力任せに切り裂
いていた。

「オークだ。オークウォーリアだな、あれは」

6つの種族の一つ、オークは非常に高いHPと高い攻撃力を持っている。特に近接武器を得意とするウォーリアとの相性がいい。

反面、足が遅く命中率も低いが少数の人間には好まれている。おおくの人間は、そのビジュアルで好き嫌いが分かれるところだろう。

かつこよくもなければ、かわいいわけでもない。肌は緑色で、髪もスチールウールみたいに硬そうで、筋肉モリモリ。

はっきり言って、イロモノだ。だが、オーク間での友情は厚いらしく、オーク専用挨拶があるらしい。それくらい一部には人気がある。

「プンもオークにすればよかったのにな」

「えー嫌だよ、かわいくないもん><」

あのオークの大男がプンのようなセリフをしゃべって、死にまくるとする。

……うん。蘇生してもう一回殺すな。オレなら。

「フェイブでよかったな、プン」

「@@@?」

オークがその場にいたゴブリンを全滅させたのを確認して、オレは近寄った。

「すみません、もしよかったらこの子と一緒に狩りをしませんか？」

オークは剣を構えたままの姿勢で硬直する。数秒間があつて、返事がきた。

「ぬを。ぼくちん如きでいいんですかい？ レベルも低いし、装備もシヨボーンですぞ（．．．）」

「こつちも似たようなものだし、オレが外部でヒールするんで気にしないでok」

「ぬを。ほんじゃお言葉に甘えて！ ぼくちんキラ・ヤマモトです、オークウォーリアのレベル21です。別のサーバーから移住してきました」

「へえ、何で？」

「PKギルドが我が物顔で狩り場占領するんですお。ぼくちんのメインキャラだったラクス・クラタや、アスラン・ザマもよく彼らの毒牙にかかり……コロニーへの移住を決断したのです。地球の重力の井戸に引かれたままでは、ニュータイプに覚醒できないと思いますて」

……オタクかよ。

それにこのサーバー名、コロニーじゃねーし。

「なんだか解らないけど、すごい理由があつたんだね@@！
npun321だよ、プンって読んでね^^」

プンがヤマモトの前に出て、くるつと踊って見せた。

「ぬお。フェイブっ娘！ プンちゃんハアハア」

「ヤマちゃんおもしろーい^^ よろしくね！」

またひらりと舞ったブン。ヤマモトは無言であつちにいったりこつちにいたり、プンの周りをうるちよろしていた。

「何やってんの、ヤマモト？」

「どのアングルが、一番ベストになって、白っていいよねえ。うぶぶ。中尉もそう思わんかね？」

「^^？」

ブンはヤマモトの変態行為に気付いていないらしい。あと、誰が中尉だ。

「この変態が！ やっぱりお前はいい！ あつちいけ、しっしー！」

「ぬお。変態とは失敬な！ 僕は」

ヤマモトのソーシャル『笑う』でオークの巨体が反り返り、豪快な笑い声がスピーカーを振動させ、部屋に響いた。

「ド変態だ！」

GMコールは慎重に

ド変態と開き直ったヤマモト。むさ苦しい、暑苦しい、息苦しい。そして、今もなおプンの背後を動き回っている。ド変態の鑑のような男だ。

はつきり言っただ後悔している。ヘタをこくと、プン以上に厄介な存在かもしれない。

「やっぱいいや。他を当たるんでさようなら」

こういう事は、さっさとやってしまった方がいい。失礼だが、なんとなく危ない香りがするのだ。

「そんな！ ぼくちん、プンちゃんの為なら何でもやるよ！」

「そうだよ、エルくん。ヤマちゃんかわいそうだよー><」

プンの心は広い。ヤマモトに背を向け、オレに向き直るとソーシャルで、泣き始めた。そして、その後ろでヤマモトが座って、『プンちゃんおパンツ鑑賞会 ハアハア』をどうどうと開催している。

「ぬを。心優しき我が女神！ あれですか！？ あなたは死なないわ、私を守るもの。でございまするか！？ ぼくちん、プンちゃんとシンクロ率1000%オーバー！ プンちゃんに向けて、ぼくちんのエントリープラグ強制射出！」

最後のは下ネタじゃないか。もう我慢も限界だ、少し脅してやる。

「おいブン。GMコールだ。へんなプレイヤーに粘着されています、セクハラ発言で不快な思いをしているので対応お願いします。ってGMさんに伝えるんだ」

「はい^^」

その後に、『もちろん冗談だ』とブンにウイスを送っておく。

「ぬお、GMコール（。。。）」

GM……たぶん、ゲームマスターという意味だと思う。一言で表せば運営だ。不具合が起きたときの報告や、規約違反者を通報する時、GMにメッセージを送る。それがGMコールだ。

もちろん、本当に通報するつもりはない。ブンだって、解ってるはずだ。これは単なる脅し。

ちなみに、重大な規約違反者については、アカウントの停止や、最悪削除される場合もある。

「まあ、もちろんウソだ。だが、これ以上バカな事を言って付きまとうなら」

「エルくん、終わったよ^^」

「ん？ 何がだ？」

「GMコール^^ 目の前に変態さんがいます>< 私襲われそうで怖いです;; 捕まえてください！ ってGMさんにメッセージ送っておいたの」

「……」

「ガクブル（。。。）」

「プン、やればできる子なんだよ。いえーい^^」

「お前はアホか！ 本当にやるなんて何考えてんだ！ そもそも、冗談だってウイス送っておいたろっが！」

「えー……；； あ、ほんとだあ、気付かなかった。あは（。）」

あは（。） じゃねーよ。

すると突然、ヤマモトがフェードアウトして消えて行った。まさか。

「……噂で聞いたことがあるな。規約違反してGMに睨まれたら、特殊なフィールドに転送されるって……」

「え！ ヤマちゃん……ご冥福を祈ります（>人<）」

祈るな。

しかし、また突然ごつい緑の巨人が現れ、豪快な笑い声がスピーカーを振動させ、部屋に響いた。

「ヤマちゃんふつかあああつっ！ なんか回線の調子悪いみたいだったけど、直った！」

回線が切れて落ちただけだったか……。

「おかえりヤマちゃん^^ノ プンいっぱい心配しちゃったよお」

さっきまでご冥福を祈っていたお前はどこにいった。

「まあ、もうどうでもいいや。ヤマモト、あっちで一緒に狩ろう。オレがMOB引いてくるからプンと同じのを攻撃してくれ」

なんだかんだで、貴重なプンと同レベル帯のプレイヤーだ。今日だけは我慢してやる。今日だけは。

それからさっきまで、プンと一緒に狩りをしていた場所に戻ると、ヤマモトを加えて再開する。

プンだけでもお代わりが必要な状況だったので、周囲からありつたけを引いてくる事にした。他に人がいないのが、こういう時は助かる。

オレがMOBを引っ張る。プンとヤマモトがそれを倒す。オレがMOBを引っ張る。プンとヤマモトがそれを倒す。それをかれこれ20分は繰り返した。

その成果で、プンは瞬く間にレベルが22になり、ヤマモトも25になった。

ヤマモトの火力もまた相当なモノだ。プンと違い初心者ではないので、狩での立ち居振る舞いをよく心得ている。特にスキルを使うタイミングが絶妙だ。

このままレベルが上がっていけば、上級狩り場でも貴重な戦力として色んなパーティーから引つ張りだこになるだろう。

……これさえなければ。

「「「オレがガ ダムだ！……！」」」

「「「オレがガ ダムだ！……！」」」

「「「オレがガ ダムだ！……！」」」

「「「オレがガ ダムだ！……！」」」

「「「オレが」」」

「うるさい」

ヤマトはどうやら、攻撃スキルを発動する際にマクロを組んでいるらしく、スキル発動と同時に、上のセリフがメッセージとして表示されるらしい。

他にも、『虎牙 斬！』とか、『オレのこの手が光ってうなるう』とか、『分の悪い賭けは嫌いじゃない』とか言っていた。

何を言っているのか、さっぱりわからない、最後の一つだけは。

「しかし、戦ってときのプンちゃんかわゆす。ハアハア」

「ハアハア言うな、オタクが」

「エルくん、ハアハア^q^」

「ブン、お前まで真似するな」

「中尉、ハアハア」

「エルくん、ハアハア^q^」

「ハアハアうるせえ！ あーもう、10分休憩！ オレ、飲み物取ってくる！」

「いてらー^^」

「あ、ぼくちんコーラでいいおー。ストロー付けといてね、あと、おいしくなるおまじないも、かけてね」

ヤマトトうぜえ。

席を立ち、足早に部屋を出て一階のリビングへと向かう。家族はもう寝てしまったらしく、リビングは真っ暗で誰もいなかった。

時計を見ると、すでに11時を回っていた。もう少し狩をして、今日は終わろう。

インスタントコーヒーの粉を愛用のマグカップに入れ、ポットからお湯を注ぎ、それをかき混ぜる。少し、冷ましてその場で一口含む。

やはり、コーヒーはブラックに限るな。

マグカップを片手に階段を昇り、自分の部屋へと戻る。机の前にたどり着くとイスを引いて、こぼさないようにパソコンから離れた場所にカップをそっと置く。

「何だこれ……」

席に着いたオレはその光景に絶句する。エルトが……。HPが0になり、戦闘不能になっていた。

オレ以外のメンバーは無事のような。離席しているのか、キャラが突っ立ったまんまで、虚空を見つめている。

急いでログを確認する。すると、1000を超える大ダメージを数発くらっていたことに気が付く。

バカな。このレベル帯でここまで強力な攻撃を仕掛けるMOBはいない。一体何が……。

その時だ。画面の端を何かが横切って行くのがかすがだが見えた。あれは……プレイヤー？

ダメージを一体誰から食らったのかを調べると、オレのキーボードを打つ手がかすかに震えた。

『斬魔』……。

PKだ。

PK襲来

PKとは、Player Killerの略称である。名の如くプレイヤーを殺すプレイヤー……Player VS PlayerのPVVとは違う。

高レベルプレイヤーの一方的な虐殺を差す場合が多い。

特にこの『斬魔』というPKは、1年前からずっと活動を続けている有名なPKだ。

種族はダークエルフ。職業はローグで、レベルは60代後半。武器はデュアルダガー……両手に装備した二振りの短剣だ。一撃の威力は低いものの、攻撃速度とダガーによる必殺のスキル『デュアルスタップ』は高いHPを誇るオークでも、一撃で戦闘不能にする事が出来る。

また、短時間だが姿を消すスキルもあり、気が付くと地面に転がっているなんてこともある。

強敵だ。

それも、『斬魔』はPKギルドのギルドマスターで、うかつにPKKをしようものなら、そいつの所属しているギルドに前面戦争を仕掛けてくる。

畜生……人が席を離れている間にPKとは……。

オレの頭には、先ほど淹れたコーヒーよりも熱く煮えたぎった血

液が駆け巡っていた。

……いや……落ち着け。確か持ち物の中には完全に経験値を復旧させる『神秘の復活薬』があったはずだ。ブン達にこれを使って蘇生してもらえれば、減った経験値は取り戻せる。

とにかく今は……ブンとヤマモトを早くログアウトさせるか、村に帰還してもらうしかない。

「おい、ブン！ ヤマモト！ 早くログアウトしろ！」

しかし返事はない。まだ席を離れたままらしい。どうする……？

「たっだいまー＼＼／」

ブンが能天気にも今帰ってきたらしい。

「あれ？ エルくん何してるの？」

「バカ！ PKされたんだよ、一旦ログアウトしろ！ もたもたしてるとお前もやられるぞ！」

『わかった^^』。そのブンのセリフが画面に表示されたのと同じ時、短い悲鳴がして、ブンは地面に横たわった。

その後ろに立っていたのは、漆黒の塊。全身を黒いレザーアーマーに身を包み、黒い長髪を風になびかせ、褐色の肌の男が右手の短剣を構え、静かに立っていた。

斬魔だ。

そして、すぐに掛け声とともに画面から消えてしまう。姿を隠し、一撃で仕留める……ヒットアンドアウェイの戦法を得意とするダークエルフローグらしい殺し方だ。

「ヤマト！ いるならすぐにログアウトしろ！」

しかし、ヤマトからの返事は無い。このままでは、全滅だ。

「ぬを。何ぞこれ！？」

「PKだ。早くログアウトしろ。20分後にまたログインしてくれ。その頃にはあいつもここを離れているはずだから」

「わかった。ぼくちゃんがPKKしやる！ プンちゃんをこんなけしからん格好にしたPKは許せん！ ハアハア」

「やめろって！ 相手はレベル60代のダークエルフローグだぞ！ 生き残ってるのはお前だけなんだ！ 神秘の復活薬を渡すからこれでオレを蘇生して」

しかし、ヤマトはオレの言葉を聞かずに飛び出していった。バカな事を……敵うはずがないのに。

ヤマトが走っていた背後に、忽然と姿を表した斬魔。ヤツの体が光を放ち、足元に光が渦巻く。スキルが発動したのだ。

『デュアルスタップ』が。

しかし、スキルは失敗してしまったらしく、ヤマトのHPは1

ミリも減っていない。ヤマモトはそれを実力差と勘違いしたのか、振り向くと大剣を頭上高く掲げ、それを一気に斬魔へと振り下ろした。

だがしかし、その攻撃は虚しく空を斬る。今度は横からの一薙ぎ。それも軽くかわされてしまう。

斬魔が消える。とっさにヤマモトは背後に振り返りデュアルスタツブの一撃に備えようとする。しかし　　斬魔が姿を現したのは、ヤマモトの背後。

つまり、もともとヤマモトの正面に出るつもりでいたのだ。

斬魔がヤマモトに攻撃を仕掛ける。スキルではなく、通常攻撃に切り替えたらしい。獣が吼えるような、双剣による連撃。息を付く暇すら与えない。

しかし、ヤマモトはそれに耐える。まったくHPが減っていない……減っていない？

注意深く斬魔の両手を見てみる。ヤマモトのHPが減らない理由がすぐに解った。

素手だったのだ。斬魔は、最後に残ったヤマモトをすぐにPKしようともせず、遊んでいるのだ。

「てめえ！　ふざけんじゃねえぞ！」

激昂したヤマモト。通常のチャットではなく、エリア一帯に響き渡る、シャウトでそう叫ぶ。

なおも素手で殴り続ける斬魔。ヤマモトはその斬魔を攻撃しようとするが一向に当たる気配を見せない。

当然だ。40近いレベル差に加え、オークの命中率とダークエルフの回避率。分が悪い所の話では無い。相手が悪すぎる。

「『オレがガ ダムだ！！！！』」

ヤマモトのスキルが斬魔に襲い掛かる。奇跡的な確率で命中したその一撃は、斬魔にとっても予想外のことだったらしい。

急に素手で殴るのをやめると、双剣を装備して音も無く消える。

そして次の瞬間にはヤマモトの大きな体が崩れた。

「キモオタザマアwww テラワロスwww」

斬魔がソーシャルで笑う。そして、シャウトでそう言った。

「ちくしょう……」

ヤマモトはそう呟く。完全に遊ばれた上に瞬殺された。だから……やめると言ったのに……。

斬魔はすぐにここを去ろうとはせず、不意にヤマモトへと向かって歩き出した。

そして、ヤマモトの死体の前に立つと、その上に座り込んだ。さらに、ガラクタやゴミアイテムをヤマモトの周りにバラ卷いて、周

罎を埋め尽くす。

「ここは緑のゴミ箱。あーくっさ。ゴミはゴミ箱に捨てちゃう俺様
SUGEEE」

「くそ」

PKは……最悪だ。オレも今は手も足も出ない。……不意打ちでなくとも、オレだって一撃でPKされてしまうだろう。

せつかく積み上げた経験値も、狩り友と過ごした楽しい時間も……こいつらは平然と踏みにじって、その上に唾を吐きかけて嘲笑う。

オレの視線はリスタートボタンに注がれていた。エルトでは勝てない。けれど……あいつなら……。『本当のオレ』なら……こんなヤツ、簡単に……。

リスタートボタンにカーソルを合わせた時。白い小柄な少女が、斬魔の背後に立っていた。

誰だ？

「ヤマちゃんをこれ以上いじめるな><」

ブンだった。

隣を見ると……戦闘不能で横たわっていたはずのブンがいない。まさか、こいつ……蘇生を……経験値の復旧をあきらめて、村に戻ったあと再びここに……戻ってきたのか。

「www」

プンが斬魔にしかける。しかし、当たらない。

「フェイブってwww ちょwおまwww」

斬魔は依然座ったままである、それでも攻撃が当たらない。だが、プンはそれでも無意味な攻撃を繰り返す。

「ネタやんwww しかも、灰色の狼って。これは戦争やなwww」

斬魔はやれやれと言った感じで、起き上がると姿を唐突に消した。

ダメだ。早く逃げろプン。お前の安っぽい友情だか正義感で立ち向かって、どうしようもないんだ。だから、もうやめろ。

そして、再び姿を現した斬魔。

プンは背後を取られて。

斬魔が吹き飛んだ。

吹き飛んだのだ。

斬魔の背後にいた、銀髪の白い素肌をした赤い目の青年に。

フェイブナイト。フェイブナイトの青年である。

「@@@」

プンは何が起こったか理解できず、その場に立ち尽くす。

斬魔が体勢を立て直し、フェイブナイトの青年の姿を認めると、ターゲットを変更し、そちらに向かう。

フェイブナイトの青年も、斬魔に向かって走り出した。

……ムダなことだ。

あいつには、勝てない。

フェイブナイトの青年はヤマモト以上に巨大で凶悪そうな剣を構える。

斬魔は、馬鹿の一つ覚えのように姿を消して、青年の背後へと回り込もうとする。

フェイブナイトの青年の足元に光の渦が巻き起こり、それが体全体に行き渡る。

そして、その刹那に姿を現した斬魔が間髪入れずにデュアルスタップを叩き込んだ。

しかし、青年には何のダメージもない。ヤマモトの時のようにスキルが発したわけではない。確かに命中していた。

だから、斬魔はあいつには、勝てない。

「プン。よく見ておけよ……あれが、このサーバーで最強のナイト……フェイブナイトの桜^{もみじ}だ。そしてあれが、60レベルで覚えるフ

エイブナイトの神スキル、ヴァンガード……」

柎、舞う

ヴァンガード。確か英語で前衛っていう意味だったと思う。

このスキルが神スキルである理由は、フェイブの特性と関係している。これまで何度も触れてきたようにフェイブは他種族よりも飛びぬけた攻撃力を持っている。

それは、近接物理職で一番攻撃力の低いナイトですら、他種族のウォーリア以上の攻撃力を持つ。

しかし、最大の弱点が打たれ弱さだろう。それを克服するのがヴァンガードである。

ヴァンガードは、スキルを使用したプレイヤーの攻撃力と防御力を入れ替えるスキルなのだ。

仮に攻撃力2300 防御力 560なら、それが攻撃力560 防御力 2300となる。

このスキルはトグル型……ようするにスイッチのように、オン・オフする事が出来るもので、リアルタイムに使用することができる。

柎はこれを絶妙なタイミングで、攻撃の瞬間にオフにし、防御の瞬間オンにすることができる。はつきり言ってかなり面倒というか、細かい作業であつたりする。

そのお陰か、1年前から『トーナメント』で勝ち続けており、現在ではナンバー1の地位にいる。

その椀が……目の前にいる。

何故ここにいるのか？ 理由は簡単だ。斬魔がプレイヤーを狩るPKなのに対して、椀はPKを狩るPKKなのだ。

おそらく、この辺りに網でも張っていたのかもしれない。斬魔に對して個人的な恨みを持つものは少なくないので、斬魔を見かけたという情報を誰かが椀に流した可能性がある。

不意に斬魔が動いた。ヤマモトの時と同じ様に姿を消し、椀の前に現れる。椀はすぐさまヴァンガードを展開。嵐のような斬撃を大剣で受け止める。

椀はナイトでありながら、盾を持たない。その代わりに武器の中で一番攻撃力の高い、大剣を装備している。これは、ヴァンガードの恩恵を大きくするためだろう。

オレは二人が戦っている間に、プンに神秘の復活薬を渡して、蘇生してもらつと、すぐにヤマモトにリザレクションをかけた。

再び視線を彼らの戦いへと移す。斬魔が押されている。ヴァンガード状態の椀に傷を付けるのはそう容易いことではない。あとは時間の問題だろう。

再び斬魔が消える。椀は不意打ちに備える。しかし、5秒経つても10秒経つても奴の姿は現れない。

「あ！ エルくん下見て！」

プンの言つとおり、崖の下を見ると逃走中の斬魔の後姿があった。
……逃げたか。

「プン、ちょっとあの人にお礼言ってくるね^^」

プンは戦いが終わり、大剣を背中に背負い、戦闘状態を解除した
椀に駆け寄った。

「助けてくださってありがとうございます」

早速、打ち間違えたらしい。

「いえ、別に。PKを潰すのが趣味なんでね」

椀は素っ気無くそう答える。

「強いんですね、ビックリしちゃいました@@w」

「俺なんか……大したことないですよ。カインさんに比べたら……」

「カインさん（？―？）」

「ああ、初心者の人ですか？ なら知らないのも当然ですかね。カインさんは、一年前までこのサーバー最強のナイトだった人です。俺も初心者だった頃、色々お世話になったっけ」

「へえ、その人。今はどうしてるんですか？？」

「一年前くらいに……ちょっと事件があつてね。それが原因で突然

誰にも言わずに引退しちゃったんですよ。今はどうしているのか……」

柊は、背中を向けこの場を去ってゆく。

「斬魔がまた別の狩り場に現れたようなので、行きます。狩り……頑張ってください。それでは」

次の瞬間、柊の姿はそこには無かった。

「あの人、すごく強かったね@@w プンもあんな風になりたいなあ><」

「ぬを。プンちゃんの好意がさっきのフェブ男に向かっている！？ 許すまじ、あの男め！」

ヤマモトのほうも、落ち着いたらしい。目の前で柊が仇を討ってくれたこともあるのだろう。……逃がしてしまったが。

「あれね。そういえば、エルくんって柊さんと知り合いだったの？ 柊さんの事、詳しくあったみたいだし@@」

「別に。このサーバー最強のナイトの情報くらい、ベテランならみんな知ってるさ。柊はPKKとしても有名だしな」

「ふーん、そうなんだあ。」

柊が消えた方向へとカメラを向ける。

ふと、思い出す。あの日、オレの前で装備も何も付けず、スキル

の使い方をまったく知らずに狩をしていた、一人の初心者プレイヤーの事を。

……強くなったんだな、栞。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3140z/>

カオス・クロニクル

2011年12月17日22時54分発行